

G I G A スクール構想を巡って

袖村ふじを

コロナ禍の影響で一変してしまった学校教育も徐々に通常の状態に戻りつつあるが、教育活動に様々な影響を及ぼしている。

9月から10月にかけては、小学校も中学校も修学旅行のシーズンとなり、小学校は隣県の会津や日光方面への行先を県内の庄内地方へ変更して実施、中学校は関東方面を岩手に変更しての実施となった。

特に中学校は、関東への修学旅行となれば、保護者の理解を得るのは難しかったようだ。子どもたちには気の毒だったが、幻のフジテレビ、幻のデイズニールランドになってしまった。でも、一般の状況では致し方なかったと思う。

令和元年度補正予算案が2019年12月13日に閣議決定され、児童生徒向けの1人1台のPC端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備するための経費が認められた。

これを受けて、文部科学省は「1人1台のPC端末環境は、もはや令和の時代における学校のスタンダードである」とし、「ハード・ソフトの両面からの教育改革に取り組む」と宣言した。

これが「G I G A スクール構想」と言われるもので、これによって我が町における学校教育も大きく様変わりしようとしている。他市町では既に児童生徒用のタブレット端末を導入したところもあるようだが、余りにも急すぎて、何をどのようにすればいいのか迷っている自治体や学校があるのも事実である。そもそもこの「G I G A スクール構想」とは一体どのようなものなのだろうか。

大きくは、前述したように、義務教育期の児童生徒のために1人1台の学習者用PC（タブレット端末）と高速ネットワーク環境の整備を今後5年間で進めることなのだが、その目的として子どもたち一人一人の個性に合わせた教育の実現を謳っている。

「G I G A」と聞いて最初に思ったのは、ギガバイトのギガで、膨大なデータ量のことをイメージしてしまったので、「太い回線を張り巡らせて通信環境を整備し、PCを使いこなせるようにする」そのようなイメージの「G I G A」だと思ったのだが、この「G I G A」はギガバイトのギガではなくて、「Global and Innovation Gateway for All」の略ということがあとで分かった。つたない直訳のところは勘弁してもらいたいだが、「すべての子どもたちにグローバルで革新的な入り口を」そのような意味になるようである。

構想の柱となるポイントが何点もあり、一つめは「校内LANの整備」である。現在のネット

ワーク環境では、Wi-Fiの通信が途切れたり遅くなったりして授業が滞ることもあり、教員ではタブレットに対処できないという声もある。一般のコロナ騒ぎなどから、遠隔授業の増加が予想され、より高速なネットワークが求められると言う。

二つめは児童生徒用のPCの充実だ。これまでもクラスの2人で1台程度のPCが割り当たるように整備を進めてきたが、今回の構想では、国はすべての児童生徒がPC（タブレット端末）を使えるようにするという方針を打ち出してきた。

2020年度から小学校で実施されている学習指導要領には「情報活用能力の育成」や「ICTを活用した学習活動の充実」が明記されており、教育に「トレンド」という言葉が馴染むかどうかわからないが、今やインターネットを通じて人と人がつながることを意味する「ICT」なくして学校教育はないような勢いである。

先般議会の一般質問の中で、「PCやタブレットを自由に使いこなす子ども」と「野山を駆け回る子ども」とどちらが大事なのかというようなことを訊かれ、答弁に窮したことがあった。

PCを使いこなすのも子ども、野山を駆け回るのも子ども、どちらが大事だと一概には答えられないが、「自然の中における体験が人として生きる素地を作る上でとても重要であり、そのことが元になって人間としての暮らしを豊かにするためにPCを使っていく」ということになるのではないかと分かったような分からないようなことを答弁した記憶がある。

時勢に押されて、あるいは、学校における自然体験活動の時間の確保が容易でない中、自然と関わる体験活動の縮小が全国的に見られている。もちろん、自然との関わりは学校の教育活動だけで行われることではないのだが、野山で時間を気にすることなく遊べることが難しくなった今、頭でっかちの子どもたちが増えているのも事実だろう。

私が現職の頃には、小学校5年生の時期に2泊3日の自然教室が行われていた。この自然教室を子どもたちは大変楽しみにしていて、私は意地悪く、「今日は野営といってテントに泊まるんだよ。雨は降りそうにないけれど、雨が降ってほしいね。その方が面白いよ」などと言って、子どもたちを「ええーっ！」などと驚かせていたものだ。

本当は10泊くらいさせれば、じつくりと自分たちの生活を見つめ直したり、家庭のありがたさを身で知ることなどの活動が組めるのだが、「脱ゆとり教育」が叫ばれその分教科書の内容が増えたため、学校行事としてこのような活動が組みにくくなってしまった。

この自然教室の中に、山の中のコースを駆け巡る「自然の冒険」というプログラムがあり、崖の登り下りもあればバランスを取りながら丸木橋を渡るようなところもあったので、シャツやジャージをどろどろにしながら半日を過ごしていた。

こんなふうに自然と意図的に向き合わせなければならぬこと自体不自然であるのだが、学校教育のできる範囲で体験させてあげなければならないという思いから、毎年取り組んできた。



崖下りは大人でも目が眩みそう。思わず子どもたちにも声を掛ける。
「ロープさたづいで、足元よく見で降りろ。んでないど、がんむぐれつぞ！」*
それを傍で聞いていたある男の子が途端に反応した。
「えっ、校長先生。ここを上手に降りたら、ガムくれるの？」

*ロープにつかまって、足元よく見て降りなさい。そうしないと、転げ落ちるぞ！